
静かな秋の子守唄

古今彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静かな秋の子守唄

【Nコード】

N5687J

【作者名】

古今彼方

【あらすじ】

夏目秋霖は写真部に所属する高校2年生。ある朝、普段は一切関わりのない実父の訃報が舞い込んでくる。

1 日目（前書き）

乙女ちつくな攻と神経質なちよつとやんでれな攻と普通の少年の話になる予定です。

1日目

その日は平日で、特に何の予定もない日だった。

携帯のアラームを止めて、ベットからのそのそと起き上がる。身支度をして部屋から出た。リビングに行く前に、でかい音をたてて弟の部屋の扉を開ける。案の定目覚時計が鳴り響くなか眠り続ける弟を叩き起こす。これをしてしないと紫穂さんの機嫌が最上級に悪くなるから。まだ寝ぼけている弟をひきずりながらリビングに下りるのが俺の朝の始まりだった。

リビングへ続くドアを開けた瞬間、違和感を感じた。いつもなら慌しく走り回りながら、朝の食卓を整えてくれる紫穂さんが食卓の席につき、組んだ両手の上に頭をうなだれさせている。紫穂さんを励ます様に肩に手をやる、父さんの穏やかな表情には少し陰りを感じた。

「楸霖」

なにかあったのかと尋ねる前に、紫穂さんが俺の名前を呼び、座れと促す。寝ぼけ眼の弟も席につき、空気の重さは桁違いだが何時もの家族の食卓が完成した。

「あのね、楸霖」

何時も自信に溢れた紫穂さんには珍しい、暗い声だった。

「貴方の父親が、死んだの」

告げられた言葉はこうだった。完璧に目が覚めた弟と、俺は顔を見合わせた。そして、今俺たちの目の前にいるのは幻覚かなんかなのかという目で、紫穂さんの隣りにいる、優しい顔立ちの俺たちの父親を見た。

「え、じゃあこの父さんおばけなの」

弟が俺も考えていた事を父さんを指差しながら言い切った。その瞬間、紫穂さんの鉄拳がとんだ。拳と頭が触れ合い、良い音が鳴る。

「誰が誠一さんの話をしたのよ。縁起でもない事言うんじゃないわよ」

母さんひでえと頭を押さえる弟。父さんは困った様に微笑んでいる。「楸霖、あんたもアホな事考えたんじゃないでしようね？」

俺はぶんぶんと首を横に振りながら、弟と身を寄せ会い縮こまった。今日の紫穂さんはいつもの倍ほど手が早く横暴だ。

「楸霖、あんたの血縁上の父親よ。葛西蒼也が死んだの」

それで、やっと事情が解った。

「え、あの人死んじゃったの？なんで？」

俺が言えたのはこれだけ。感じたのは悲しみでも喜びでもなく、少しの驚きだけだった。

「なー兄ちゃん」

コンビニの前でパンを頬張りながら、シュウが尋ねる。動揺しているらしい紫穂さんは朝食どころではなく、俺たち兄弟は父さんに朝食を買うようおこずかいをもらったのだ。

「カサイソウヤって誰？」

心底不思議そうな弟。確かにあの後の会話は、葛西蒼也が誰なのか知らなければちんぷんかんぷんだったろう。

「紫穂さんの前の旦那さん。つまり俺の本当の父親の人」

本当の、の所で違和感を感じ、直にその正体に気付いた。紫穂さんは葛西蒼也さんを語る時、絶対に「本当の」という形容詞をおうとはしないのだ。そんな事を考えていて、弟の変化に気がつかなかった。

「母さんバツイチなの？つーか俺たち父さんの子じゃないの？」

驚きに目を見開いて詰め寄るシュウに眩暈がした。

「あのな、」

この話題が出る度にシュウは驚いたり焦ったり忙しい。

「毎年夏休みに、島根に誰の墓参りに行くんだよ」

「俺のかーちゃん」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「あ」

「…」

「そっか、そーだった！」

忘れてたー！と照れくさそうに笑うシュウ。シュウが保育園に通う前の話だし、俺たち兄弟と父さんはなぜか似ているから、普段は忘れているのは仕方がない事なのかもしれない。でもそろそろ覚えていいんじゃないだろうか。

ぱつと見普通の家族に見えるうちの家族は、実はちよつと複雑だ。

我らが母さん紫穂さんと先ほど亡くなったと聞いた葛西蒼也の間に俺、楸霖が生まれた。そして俺達の父さん、誠一さんと誠一さんの前の奥さん寿実さんの間に弟のシュウ、秋一は生まれた。そしてそして、奥さんが秋一を産んですぐに亡くなった誠一さんと、憎悪するまでに仲が険悪になったため離婚した紫穂さんが結婚して、今の俺たちの家族が出来た。

俺たち兄弟は血の繋がりが全くないし、片方の親とも血が繋がっていないのだ。しかし、再婚は俺もシュウも覚えていないかなり昔の話のため、普段は忘れられている事実なのだ。その上、父さんと俺とシュウは顔も雰囲気もそっくりで、血の繋がりが無いと言った方が驚かれるぐらいなのだ。

「覚えるよ…」

「だってさあ、普段あんま関係ないし」

「…まあな」

困るのは血液型をつっこまれた時ぐらいだ。

「兄ちゃん反応めちやくちや薄かったね」

「だって俺、一回ぐらいしかあったことないもん」

「そっかー」

弟の反応もめちやくちや薄かった。

幼い時別れたきりの葛西蒼也さんとは、小六か中一ぐらいの時に一度だけ会って、当たり障りのない会話をした事があるだけだ。それ以前も以降も特に関わりは無い。それに父親と言われてすぐさ思い浮かぶのは父さん、誠一さんだ。

しばらく、シュウとコンビ二の前の低い柵に腰掛けていた。ぼんやりと記憶の中の葛西蒼也さんに思いを馳せる。シュウは隣りでひたすら食べていた。

「シュウ、シュウ君おはよう。珍しいね」

1日目（後書き）

初めて投稿しました。勝手にわからないので、何か不備があったら
すいません…。のんびりつづきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5687j/>

静かな秋の子守唄

2011年1月29日08時06分発行